

まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～



関西元気企業

～ 働くお母さんのために！ ～

子供が熱を出した時などに、自宅へスタッフを派遣して子供の面倒を見る病児保育サービスを中心に、家事代行から、保育所への送り迎え、悩み相談まで、働くお母さんを総合的に支援する会社、株式会社マザーネット。

代表の上田理恵子さんが起業したきっかけや、その経営理念に迫りました。

企業情報

名称	株式会社	マザーネット
所在地	大阪市淀川区西中島 6-2-3	チサン第7ビル 308号
設立	2001年	代表者 上田 理恵子
従業員	8名	資本金 10百万円
H P	http://www.carifami.com	

●起業される前は何をされていたのですか。

大学を卒業後、大手の空調メーカーに入社して研究開発を行っていました。入社当時は男女雇用機会均等法が制定される前で、まだ働く女性は少なく、その会社の中で、私は総合職として採用された女性第1号でした。

●働くお母さんを支援しようと思ったのはなぜですか。

私自身が、仕事と子育てを両立しようとする、様々な壁にぶち当たったのがきっかけでした。

一つ目の壁は、仕事に復職しようとしても、入れる保育所がなかなか見つからなかったことです。30歳の11月に不妊治療を経てようやく長男を出産しました。すぐに保育所探しを始めたのですが、最初に訪ねた保育所で、「今頃来ても無理です。働き続けたいなら、4月から7月までに産出するのが常識よ」と言われ、ショックを受けました。保育所は4月入園なので、前年の7月頃までに産まないと入りにくいというのです。それから20か所以上の保育所をまわり、通う保育所がようやく決まったのは、職場復帰直前の3月の中旬になってからでした。

育児休暇中は、子どもと一緒に過ごせる貴重な時間です。にもかかわらず、入れる保育所があるだろうか、本当に仕事に復帰出来るのだろうか、と不安で仕方がありませんでした。保育所への入所のしやすさは、出産の時期や居住地によって差があることを初めて知りました。こういう情報こそ、子どもを持ちながら働き続けるために必要だと、強く思いました。

二つ目の壁は、子供が急に熱を出した時の対応でした。その日は、ようやく約束のとれたお客様との大事な商談がありました。子どもが産まれてから担当の仕事を持つことが出来ず、次男の育児



【代表取締役社長 上田 理恵子氏】

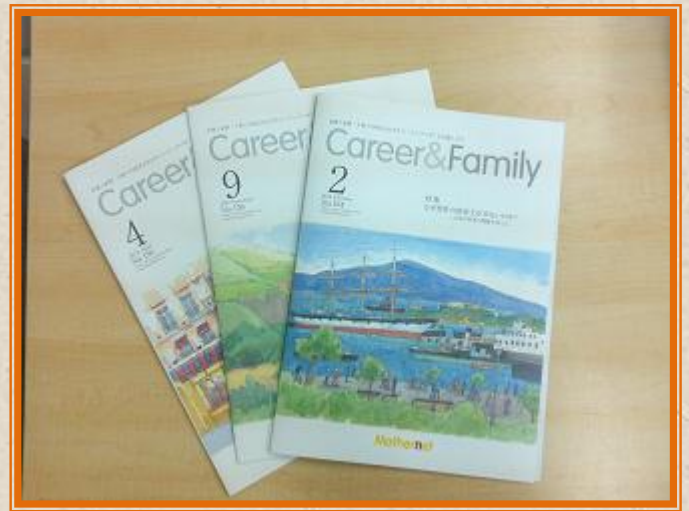
休暇から復帰して2年が経ち、ようやくいただいた仕事でした。朝、5才になる長男が、朝から熱っぽいのです。そういう日に限って、夫も大事な会議が入っているなど、緊急時は重なるものです。

地下鉄に39度の熱のある長男と一緒に飛び乗って、電車の窓ガラスで子供の熱っぽい頭を冷やしながら、お客様の会社のそばの喫茶店まで私の母に来てもらい、子どもをみてもらいながら、必死で営業を行いました。

子供がこんなにつらそうにしているのに、何とひどい母親なのだろう、と自分をせめました。しかし、ようやくいただいた仕事を失いたくない、という気持ちもありました。

そんな時は、先輩の働くお母さんたちに相談し、何度も救われた自分がいました。

私が励まされたように、先輩たちの仕事と子育ての両立ノウハウを伝え、情報交換できる場を作りたいという気持ちから、平成6年7月、『キャリアと家庭』両立を目指す会」を一人で設立しました。幸い、新聞に取り上げられたこともあって、様々な情報とともに、全国の切羽詰ったお母さんたちから、多数の相談も寄せられました。



【情報誌 Career&Family 毎月発行】

仕事が休みの土日と平日の夜は、自宅の電話で悩み相談を受けることにしました。また相談の手紙もたくさん舞い込み、毎朝1時間だけ早起きし、1日10件ずつ返事を書き続けました。

多くの相談に応えることは大変でしたが、誰かを励ますことで、逆に自分が励まされている気持ちになり、心が洗われるようでした。

また、働き続けるために本当に必要な情報を働くお母さんに届けたいという気持ちから、素人ながら情報誌の発行も始め、以後、毎月発行を続けています。

●どうして起業されたのですか。

悩み相談を受けていると「子供が急に熱を出しました。お願いだから、この子を預かってほしい。今日休んだら会社をクビになってしまいます」という切実な声が多くなってきました。

しかし、いくら頑張っても、私ができるのは情報提供だけです。それだけでは、今困っている人を助けることができません。相談の電話をもらった後、心の中に何か空しいものが引っかかることが多くなってきました。それと同時に、自分の中に「何とかしてあげたい」、「何とかしてあげなければ」という気持ちが湧き上がってくるのが分かりました。

でも、何とかしたい気持ちはあっても、個人では限界があります。会社を作って、本当の意味で「働くお母さんの役に立ちたい」との思いが強くなっていきました。

●起業までの道のりは。

しかし、いざ、起業するとなると、それを待っていたかのように大きな壁が現れます。資金面も手当てできず、相談した人の95%は反対。「もう無理かも」と諦めそうになったことは数え切れませんが、最後に、背中を押してくれたのは子どもの一言でした。

野球をやっていた長男(当時小学3年生)の夢は「イチロー」選手になること。しかしある日「僕、才能ないかもしれへん。イチローになれなかったときのことを考えとく」と言い出しました。私は

「そんなこと言ったら夢は叶わなくなるよ、頑張るって」と励ましたのです。すると子供は、「でも、お母さん、僕にあきらめるなって言ってるけど、お母さんは会社作る夢をあきらめたんと違う？」と。痛い所を突かれました。「お母さん、いつか会社を作ろうと思っている。今はお金が足りない。会社を作るには1千万円、1万円札が千枚いるんよ」

すると長男は、「じゃあこれ、お母さん使って」と、手に差し出されたのは1,876円。さらに兄弟2人でお年玉を貯めた25万円も使って良いと言います。そこまで言われて起業を断念したら、息子たちも夢を諦めてしまうかもしれない。「わかった。お母さん、会社作る！」と、その場で起業を決意しました。それから必死で集めた資本金の1千万。その資本金の中には子供たちのおこづかいとお年玉も入っています。もう戻ることはできませんでした。

●起業後、ご苦労された点を教えてください。

お金には本当に苦労しました。創業から3年目でやっと単年度黒字を達成したのですが、それまではずっと苦しかったです。削ることができるのは食費しかなく、晩ご飯のおかずは、1匹100円のさんまを私と子供2人の3人で分けて食べたこともあります。

起業時の支援という点、助成金などいろんな制度がありますが、意外とお米などをもらえると有り難いかもかもしれません（笑）。

●今ではサービス内容や提供エリアなど、どんどん拡大されていますね。

最初は病児保育サービスだけだったのですが、そのうちに、お客様から「ご飯を作っておいて欲しい」など家事代行の要望も出てきたので対応しました。保育所や塾への送り迎え、夏休み中のサマースクールの開催も、全てはお客様の要望から実現しました。

当社の事業内容は、すべてお客様が決めています。強いニーズを持ったお客様が一人でもいれば、それに応える形で、サービスを提供しています。

また、当社のサービスエリアに関して、「利益になる所」ではなく、「困っているお母さんがいる所」と決めています。行政や他社が同じようなサービス

をやっているエリアであれば、他社を紹介することもありますし、その地区の自治体の制度で活用できるものがあれば、情報提供します。しかし、近くに身寄りもなく一人で本当に困っているお母さんがいるエリアへは、何とかしてサービスを提供しようと考えます。



【 保育セミナーの様子 】

●社長の今後の夢を教えてください。

夢は「マザーネットの必要なくなる社会の実現」です。当社は時代の過渡期の会社です。お母さんが安心して働きながら子育てもできるような社会であれば、当社のサービスはもう誰も必要なくなるはず。そのような社会が実現することが、私の夢です。

●働く女性に向けてメッセージをお願いします。

働く女性は、仕事、出産、育児、など不安は尽きないと思いますが、1つだけ伝えたいことは、私自身が仕事と子育てを両立してきて、本当に良かったと、今実感していることです。

母親が働いているということは、子育てにも良い影響を与えます。母親が見た社会を子供に伝えることで、子供の視野が広がると思います。また、子育てを体験すると、部下や後輩を育てる力が身につくなど、仕事へもプラスの効果があります。仕事も子育ても両方楽しむことで、味わい深い人生になったかな、と思っています。

また、起業という面においては、生活密着型の産業にはまだまだチャンスが残っていると思います。女性のかで新しい産業が生まれて、日本が活気づくことを願っています。



【 育児休暇復帰セミナーの様子 】

＜取材後記＞

「自分が子育てに苦労したから、他の働くお母さんの力になりたかった」と笑顔で語る上田社長。言うことは簡単だが、自分も働きながら、無料で他人の相談に乗ったり、そして最後には「働くお母さんのために」といって会社まで作ってしまう。普通の人間はやらないし、気づいてもなかなかできることではない。

私たちの多くは、他者から幸福を得たいと考える。だが、彼女は、働くお母さんの相談に乗っているうちに、他者の幸福に貢献する方が喜びの大きいことを知った。

それが、彼女のエンジンとなり、最後は傍で見ていた子供たちが、そっと心のキーを差し込んでくれた。

今、彼女は、働くお母さんたちの笑顔に接することに大きな生きがいを見出し、イキイキとした姿で働いている。

掲載している情報は、平成 25 年 3 月時点のものです。